

2011年7月24日～29日 ダブリン大会特集号

IAML 2011 DUBLIN

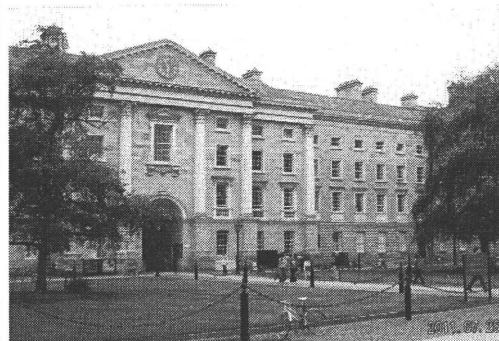
金澤 正剛 (支部長)

今年の IAML 大会は、7月24日(日)から29日(金)にかけて、アイルランドのダブリンで行われた。アイルランドを訪れるのは初めての私は、満を持して2日前の22日に成田を発ち、その日の夕方にはダブリンに着いた。今回の会場はダブリン市の中央にキャンパスを構え、アイルランドでは最古の大学と知られるトリニティ・カレッジで、希望すればキャンパス内の寮に泊まることも出来たのだが、門限や思わぬ制約などの可能性を考えた末、キャンパスの外壁から道を隔てて反対側のホテルを予約した。着いてみるとホテルの斜め前にカレッジのキャンパスに通じる鉄門がある。ところがそれはほぼ常時閉まっているのだが、朝と夕方の通勤時間(通学時間?)には開けるということが分かった。他の時間には正門から入らなければならないので、遠回りをしなければならない。それをしないで済む時間帯があることを、最初の日に気づいたことは、何とも幸運だった。

1日早く着いたお蔭で、次の日は午前中からダブリンの町をゆっくり散策することが出来た。カレッジからもさほど遠くないナショナル・ギャラリーは工事中の為、数少ない展示ではあったが、その質の高さにびっくりした。さらに隣接の国立図書館ではアイルランドを代表する詩人ウィリアム・バトラー・イェーツの素晴らしい展示にも出会った。高校時代からこの詩人に夢

中だった私は思わず2時間をかけて見てしまったが、急げば20分もかからないような展示だった。常時行われているということなので、ダブリンに行かれる際には是非訪ねてみることをお勧める。

今回の大会も形式張った開会式は抜きで、オープニング・レセプションという形で24日午後18:30からシティー・ホールで始まった。その建物は一般にはダブリン城としても知られ、その昔ヴァイキングの砦であったそうで、地下にはその一部が遺跡として保存されている。「ダブリン」という名もその砦の庭にあった「黒い水たまり(ヴァイキング語で「ダブ・リン」)」に由来すると言う。現在の建物は19世紀後半に建てられた大理石を贅沢に用いた豪華なもので、正面を入ると高い天井の広々としたロビーの床に色彩豊かなモザイクで市の紋章が描かれ、最初のうちは足を踏み入れるのも躊躇されるほどだった。そのホールの奥に小さな舞台が用意されていて、そこでまず会長の Roger Flury が開会の挨拶を行い、続いてダブリン市やトリニ



トリニティ・カレッジ (©m.k.)

ティ・カレッジの代表たちが祝辞を述べたが、後は時を移さずに左側の回廊に用意されたご馳走の前に列を作って、和気あいの親交の場となった。ちなみに今回日本からの参加者として名簿に載ったのは荒川恒子さん、伊藤真理さん、藤堂雍子さん、寺本圭佑さんと夫人の智子さん、それに私の6名だったが、他にもカナダから藤永一郎さんと、ちょうど研究休暇中でダブリンに居られた広島大学（芸術学）の桑島秀樹さんも加わり、合わせて8人となった。次回にはさらに多くの参加者を期待したい。

同日、レセプションに先立って、14:00から評議員会（カウンスル）の第1回会合が行われた。評議員会といっても、興味ある会員は誰でも出席出来るということで、既に定刻には会場はかなり多くのメンバーで一杯になっていた。第2回の会合は4日後の28日の16:00から行われたが、2つの会合の内容は連続的でもあり、議題の中には第1回に行われる筈であったものの、報告者がまだ到着していなかったため、第2回に回された、というような例もあるので、ここでは全体を一緒に報告させていただくこととする。



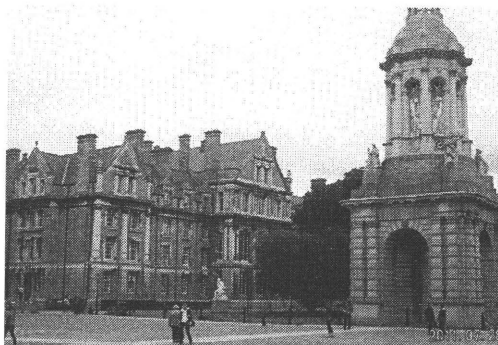
会場前にて 筆者 (©m.k.)

会議は議長を務める会長の歓迎の言葉に始まり、前回モスクワ大会の議事録の確認、会長、事務局長（Pia Shekhter）、会計（Kathy Adamson）の報告と続いたが、これらは次号の*Fontes*で報告されるので、詳細はそれを読んでいただきたい。ただし、2013年から年会費がさらに1ユーロ上がる（一般会員は2012年の38から39ユーロ、機関会員は64から65ユーロ）ことと、会費の本部への払い込み期限は3月1日と決められているのだが、それを守っていない支部があるという会計の報告は覚えておきたい。次に会員名簿に関する問題、電子交信による合理化、他の学会などとの交流関係などが議題となったが、特に注目されたのがIAMLアメリカ支部とアメリカ音楽図書館協会（MLA）の合併問題で、これは2015年予定のニューヨークでのIAML大会に大きな影響を与えるものと予測される。

続いてプログラム委員会に始まりさまざまな委員会の報告、さらに作業部会、会誌*Fontes*の編集長（Maureen Buja）の報告と続いたが、全体を通じて学会全体の連絡手段が電子化しつつあるということが感じられた。例えば現在、将来の投票を電子化する方向で検討中であるが、それにはまだまだ実験が必要であるという報告が会長からなされたが、近い将来には電子化に踏み切るというのは見え見えであったように思う。またニュースレターもウェブサイトに載せることで済ませ、印刷はしないことにするとのことである。いずれにせよ今後IAMLも電子交信に依存する方向で進められるのは明らかなようなので、ウェブサイトを検討する作業部会の今後の活動が大いに注目される。さらにこの他に音楽教育施設の図書管理に関する作業部会（議長はFederica Riva）、データベースに関する作業部会（Andrew Justice）、IAMLの将来計画を検討する委員会（Anthony Gordon）を新設する提案が出され、承認された。一方事務局長からはIAML大会の今後の予定として2012年はモントリオール（7月22～27日）で、2013年はウィーン（7月27日～8月2日）で、また2015年はニューヨーク（日程未定）で行われることが決まっているが、2014年は未定であると報告された。日本支部の皆さんもぜひこの日程を心に留めて、なるべく数多くの会員が参加して下さることを期待したい。

2日目25日（月）は早朝8:30から事務局長による新しい参加者対象のIAMLに

についての「説明と歓迎」が行われたが、私自身も永年 IAML 会員でありながら、気がつかなかったことを指摘され、実にフレッシュな気持ちでした。また同じ日の 16:00 からは各国支部の報告が行われたが、各支部 5 分以内という制限の中でそのほとんどが過去 1 年間の行事のまとめと会員数の報告で、詳しくは *Fontes* に掲載するということであるが、それならばいっそのこと報告はまとめて印刷、配布し、特に必要な報告のある支部だけが発言すれば良いではないか、という提案もあった。しかし各支部代表の顔を見るだけでも意義があるという発言もあり、審議継続ということになったが、来年以降何か新しい形で行われる可能



トリニティ・カレッジ キャンパス (©m.k)

性もある。私の報告でも前年の行事のあらましと会員数が 74 名であることを述べたが、さらに日本支部では若手の図書館員の大会出席を奨励するために経済援助を行う制度があり、今回は図書館員ではないが RISM の仕事を認められた寺本さんがその制度で参加している、ちなみに彼の博士論文の主題はアイリッシュ・ハーブであると報告した上で彼を紹介したところ、それがかなりの反響を呼び、それ以後の会合などでも何度か若手会員の経済援助が必要であることが議論された。

26日(火) 14:00 からは「IAML の将来」に関する全体会議が開かれ、ピッツバーグ大学の Jim Cassaro を議長に活発な議論が行われた。議題は IAML の機構、アウトリーチ問題、会議のあり方、教育問題の 4 つに分けて進められたが、特に最初の議題では

部会、専門別委員会、特定主題別委員会から成る現在の構成は最善のものか、未来へ向かってより良い構成を考えるべきではないかなどの問題が討議され、熱のこもった発言が相次いだ。なかには評議員会を廃止し総会に集中する、会則を改善するなどの提案も出されたが、それらはすぐに決められる問題ではなく、さらなる議論が必要であり、それにはウェブサイトのさらなる活用も重要であることが指摘された。続いてアウトリーチ問題でも電子交信の重要性が議論されるとともに、IMC や IASA などの他の団体との協力の必要性が強調された。次に IAML の会議のやり方を根本的に考え直す必要があるのではないかという議論から、大会の日程が長すぎる、大会以外には何も目立った活動が見られないなどといった発言が問題となった。また教育問題では、若い会員ばかりでなく年長者も含めての教育や、会員相互の情報交換の重要性などが論じられた。これらの諸問題はいずれも大きな問題であるので、さらに 28 日(木)の 9:00 に予定されている役員と各支部代表を中心とするラウンドテーブルで討議を続けることになった。

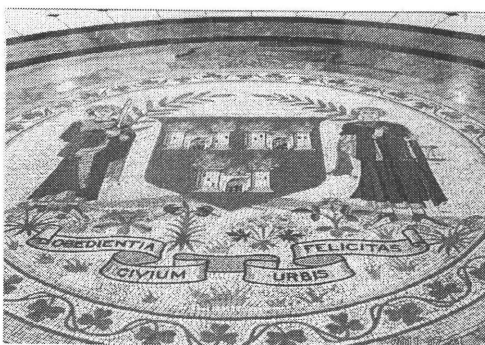
そのラウンドテーブルでは、2 日前に行われた IAML の将来に関する問題点が 9 ページにわたる概要にまとめられて配布され、それにもとづいて活発な議論が展開されたが、重要な改革案の中には会則の改定を要するものも少ないので、問題点を総合的に検討した上で役員会が試案をまとめ、モンリオールにおける次の大会でそれに

オープニング・レセプション
フルーリ会長、荒川副支部長、寺本夫妻 (©m.k)

ついて討議することとなった。具体的には各国支部からの問題点を集め、支部の存在しない地域、南米やアフリカなどのアウトリーチ問題を抱える地域にも考慮した上で、半年後の役員会で将来への改革に関する試案をまとめ、それをなるべく早急にウェブサイトなどを通して会員に知らせた上で、次の大会で議論し、必要なことを決定する、そのために、目的達成へ向けて計画を練る臨時委員会を作る、ということが合意された。

最終日の29日(金)には14:00から総会が開かれ、まずプログラム委員会委員長 Stanislaw Hrabia を議長としてさまざまな報告が続いた上で、会長による今回の大会の総括が行われ、IAMLの将来への改革を進めるために、次のモンリオール大会に向けてさらに今回指摘された諸問題の討議を電子交信を通じて続けたい、とその決意が示された。続いてカナダ代表による次回モンリオール大会への勧誘が行われた後、会長による閉会宣言が行われ、あとは19:00から国立図書館に隣接するマンション・ハウスのラウンド・ルームで催されたフェアウェル・ディナーによって今回の大会全日程を終了した。

(かなざわ まさかた)



ダブリン城 大ホールの床のモザイク (©m.k.)

IAML 2011 年

ダブリン国際大会に出席して

荒川 恒子 (副支部長)

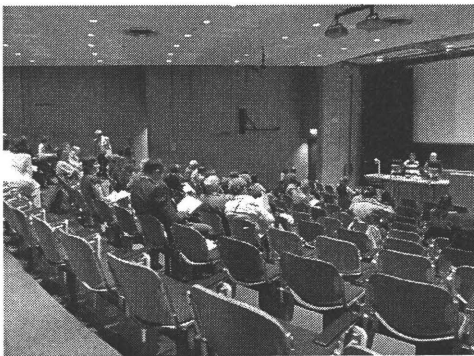
大会参加のために日本を発ったのは7月23日のことである。前日にオスロで起こった殺戮事件の、内容も意味も判明しないままの出発であった。はたして初日のカウンセセルで挨拶に立った会長 R. フルーリ氏は、ニュージーランドを今春見舞った大地震、東日本大震災、およびオスロの殺戮事件が多くの図書館を閉館に追いこみ、機能を麻痺させていることに言及された。天災、人災等と図書館は無関係ではありえないのである。私自身もこの3月に始めて経験したが、人々の生活が図書館といかに強い結びつきを持っているかを、改めて実感させられた。

さて筆者は2003年からほぼ毎年、この大会に出席している。当初は大きな楽譜コレクションをもつ図書館の、資料のデジタル化とその方法等に関する情報交換が多かった。そのような事には疎く、さらに言葉の問題もあり理解は困難を極め、自分がそれらを有効活用できるのか、心配でもあった。その後10年ほどの年月を経た今、ネット上をサーフィンして、まことに上手に作成された膨大なデータ・ベースを、自宅に居ながらにして眺めている。以前は決してやることのできなかった研究が、可能になったことを日々実感している。今年の大会発表はアイルランド、特にダブリンと関わる音楽活動、比較的小さな図書館におけるコレクション等のデジタル化の話題、さらには大きく変化してしまった図書館を取り巻く環境の中で、図書館員に求められること、図書館員の養成システム、音楽と他文化を関係付ける試み等、様々な問題に対し試行錯誤している姿が浮き彫りにされたようである。

一応英語圏での開催であるため、ほとんどの発表は英語でなされた。しかしその言語の聞き取りは、私には非常に難しいもの

があった。同様の体験は、やはり英語圏であるシドニー大会でも味わった。グローバル化が進む当今、英語さえもう少し出来ればと考えると同時に、英語の発音に個人差が大きい事に悩んでしまう。最後の日に、参加者の多くから言葉が聞き取りにくかった点が指摘された。困っていたのは自分だけではなかった、と妙なところでほっとした。

会議に関しては、最初のセッションで発表された「ダブリンのF. ジェミニアーニ (1687-1762) とヘンデル」に関して、お知らせしよう。鍵盤楽器演奏家、指揮者として世界的に名高く、多くの素晴らしい業績を挙げているクリストファー・ホッグウッド氏が、会議のパトロンとして参加され、ジェミニアーニの全集刊行に関して説明した。ポーランドで活発な活動を展開している Ut Orpheus Edizioni 社から、没後 250 年に合わせて全集出版が始まった。ジェミニアーニの全ての作品、すなわち初版や改訂版、編曲等に詳細な校訂報告が付され、しかも学問にも実践にも利用できる体裁を取っている。http://www.utorpheus.com/ を開け、リンクされた http://www.francescogeminiani.com/ をクリックすると、全集の全貌と出版現状が説明される。さらにそこには Newspaper References という項目があり、ブリテン、フランス、オランダで 1700-1800 年に掲載された新聞記事が、年代順に読める素晴らしいサイトとなっている。また主幹ホッグウッドのホームページ http://www.hogwood.org/ にもリンクしていて、彼の全活動、特に校訂楽譜、著書、



会議の様子 (© k.t.)

論文、インタビュー等、実に充実した内容を楽しめる。続いてキャサリン・ホッグがヘンデルのアイランド訪問記を報告した。彼女が使用した資料は、主としてロンドンの Gerald Coke Handel Collection に所蔵されている。これはヘンデルが毎年メサイア上演の収益をつぎ込み、支援した捨て子施療院博物館 Foundling Museum に所蔵されている。http://www.foundlingmuseum.org.uk/ から入り、collections をクリックすると、確実にこのページにたどり着ける。そこの research resource を開けると、18 世紀のブリテン音楽研究に関わるホームページ一覧表に至る。これも本当に重宝なものである。もうひとつ私にとって素晴らしいニュースは、展示会に出品していた Sutkowski Edition Warsaw が、全 7 巻 (11 冊) からなるポーランド音楽史を出版したことである。勿論ポーランド語であるが、目下随時英語訳が出来上がりつつある。http://sutkowskiedition.com/ で進行状況を注目したい。

さて恒例の水曜日の遠足には、ダブリン市音楽散歩という最も平凡なものを選んだ。トリニティ・カレッジの正門前で待ち合わせた一行は、非常に説明のうまい、博識なガイドに付き添われ、ナッソー・ストリートとの交差点にたつ「モリー・マローン」という魚売りの娘さんの銅像の前に来た。高熱を発し死亡しても行商を続けた、という彼女に纏わる歌は、アイランドの人なら誰でも知っているとのこと。本当かと問う私達のために、ガイドと UK の会員が節回しも楽しげに、唱和してくれた。その後アイランドのロック、ポップ・スターの写真が並ぶテンプル・バー周辺を巡り、少しずつ高台に出ていった。その途中で「イゾルデの泉」と称される場所を見物。今ではビルの一隅に金網が囲ってある、何の変哲もない水溜りである。しかしワーグナーの作品からイメージしていたあの《トリスタン》が、実はアイランドと関わる物語であることを思い出し、はっとした瞬間であった。小高い丘の上から、川向こうにあったというヘンデルのダブリンでの宿舎を想

い、T. アーン (1710-1778) の出演した劇場跡等を通して、ヘンデルの《メサイア》上演会場に向かった。これは今では現代音楽センターの隣に位置する。鉄の柵の奥がその舞台であるといいつつ、ガイドはその前に立ち、何かを隠している。そしてこの作品が紹介された頃の、ダブリンの人々の気持ちを、象徴的に示しているとも言えるものが立っています、とってから脇にのいた。私達はよくわからないままに、奥を覗き込んだ。そこにあったのは、裸体の青年が今にもジャンプして水に飛び込もうとしている、瑞々しい銅像であった。遠足の終わりに、川向こうに評判のカフェ・レストランがある、と教えてくれた。それは「チャーチ」という名であるとのこと。以前はまさに教会であったのに、今はオルガンのあるバルコニーはそのままに、昼間から夜まで、誰でも気軽に入れる憩いの場所となっている。大胆に豊かな想像力を用いて、多くの昔の建物を別の目的に流用しているのである。アイルランド人のメンタリティの一端を見た想いである。

飛行場に向かうバスの車窓から、一戸建ての町並みを眺めていた。どこかで見たものと良く似ている。まさにシドニー大会の時に見た建物そっくりである。そういえばこの国から出奔してオーストラリアへ、あるいはアメリカ大陸へと渡っていった人たちが多くいたのである。長い複雑な歴史を持った国、どこにいても故郷を深く愛した多くの文学者、独特の音楽をもった人々。伝統を固守するばかりでなく、いざという時には、大胆で勇敢に立ち向かう気骨を持った人々。この協会の大会を通して、今まで多くの未知の国を訪問することができた。それらの地点はいつか結ばれ、線となり得ると心に刻み、帰路についた。

(あらかわ つねこ)

音楽ライブラリアン養成の現状

伊藤 真理

2011 年 IAML ダブリン大会期間中の 7 月 27 日に、公共図書館部会 Public Libraries Branch とサービス・研修委員会 Commission on Service and Training 主催により、“Music education for public librarians” と題するセッションが開催された。当該セッションは、著者による発表と、Amelie Roper 氏 (Royal College of Music, London¹⁾) による発表、および Roper 氏による研修実習の三部で構成された。本稿では、筆者による発表は別稿でまとめる予定であるため簡単に触れ、Roper 氏による発表内容を中心に音楽ライブラリアン養成について考察する。

周知のとおり、日本国内では音楽ライブラリアン専門の教育体制がなく、就職した後に、様々な研修をとおして学ぶことになる。現職者は館内研修、館外研修、および自助努力によってスキルアップすることが求められている。一般に図書館界では、人材の不足、多様な形態の職員の雇用に伴う専任職員の減少、予算の縮小といった問題がある。そのため、職員は体制的に保障された研修を受講しにくくなっている。この傾向は、音楽図書館も同様である。

こうした背景から、筆者は音楽ライブラリアンの将来に強い危機感を抱いており、近年の研究活動として音楽ライブラリアン養成をテーマとしている。職務の関係で公共図書館を取り上げることが多いことから、第 1 段階として公共図書館での音楽情報サービスの視点から研究を進めている。そこで、まず一般の図書館での音楽情報サービスにおいて必要とされる専門的な知識やスキルに関する要件を分析した。要件抽出のために、2006 年に IAML 公共図書館部会に所属する会員を対象とした、公共図書館の音楽ライブラリアンの意識に関するアンケート調査を実施した。筆者の発表題目 “Music librarian education in Japan:

An update on the research since 2007” にある 2007 とは、2007 年ナポリ大会において行った上記調査報告のことであるⁱⁱ⁾。現在は、それら要件を修得するための自学用プログラムの構築を目指している。

筆者の発表では、まず日本の図書館が持つ特殊な、かつ世界共通と思われる問題と、これまで日本国内で実施された研修の特徴について説明した。そして、館種を問わず音楽情報サービスに関わる図書館員を対象とした国立国会図書館の音楽セミナーや、音楽ライブラリアン養成をテーマとした IAML 日本支部による 30 周年記念事業が開始されたことを紹介して、国内の研修状況についてまとめた。



Amelie Roper 氏 (©Ingemar Johansson)

次いで、“Bridging the gap: Developing professional education for music library staff in the UK and Ireland” と題して、Roper 氏によるイギリス・アイルランド (UK&Irl) 支部での研修活動について発表 (写真) があった。題目中のギャップとは、音楽ライブラリアンのスキルや経験と音楽図書館で必要とされるスキルの溝のことである。この溝を埋めるために、UK&Irl 支部は、研修・教育委員会 Courses and Education Committee を組織して館外研修活動を行っている。

UK&Irl 支部は、1996 年以降 89 回の研修を実施し、1300 人以上の講師を派遣するという実績を持っているⁱⁱⁱ⁾。研修の内容としては、各種の 1 日講習会、インフォーマルな形での初心者ライブラリアンに対す

るメンタリングやネットワーク作り、館種別の定期的な音楽ライブラリアン対象セミナー、図書館情報科目への出講や出版物の刊行、若手ライブラリアンの著述に対する表彰などがある。

1 日講習会には、研修対象者および業務別に、下記のような数種類が用意されている。これらの講習会は、1996 年以降 51 回実施され、延べ 700 人以上の講師を派遣している。最も頻繁に実施されているのが、一つ目にある“Music for the terrified”で、実施回数の約半数を占めている。以下に、各講習会の概要を記す。

●Music for the terrified.

年 2-3 回実施。

基礎的な音楽知識を持たない音楽図書館職員を対象として、音楽資料や質問回答に自信を持って対応できるようにすることを目的とする。

用語や資料についての知識、OPAC での音楽資料の探し方、著作権、基礎的な質問回答などについて講義。質問回答形式の演習あり。

●Success with music interlibrary loans.

年 1 回実施。

図書館間相互貸借での音楽資料の取り扱い方について、用語や楽譜の基礎知識、資料の所在検索などについて講義と演習。

●Virtuoso skills for music enquiries.

隔年 1 回実施。

上級レベルの質問回答サービスについての知識とスキルを修得することを目的とする。

インタビューのスキル、印刷体およびオンラインのレファレンス情報源の紹介、インターネット検索技術についての講義と、質問回答の演習。

●Music cataloguing for beginners.

毎年実施。

MARC21 と AACR 2 に基づく印刷楽譜目

録の導入編。

用語、楽譜で使用する MARC21 フィールドや英米目録規則 (AACR2) についての基礎知識、書誌レコードの選択や編集についての演習。書誌レコードの機能要件 (FRBR) や Resource Description and Access (RDA : 2010 年刊行の AACR2 に代わる新しい目録規則) の概要を含む。

●Managing music collections.

不定期。

音楽の基礎知識を持たないライブラリアンを対象とした、音楽コレクション構築の基礎に関する講座。音楽資料の管理や保存など、演習を含む。



実習の様子 (©Ingemar Johansson)

最後に、UK&Irl 支部で実施している研修を体験するための実習が行われた。実際に研修で使用している初心者向けの楽譜目録作業の配布資料を使ったもので、資料に貼られた付箋の色別にグループに分かれての楽しい実習だった。当日行った実習では、ミニチュアスコアを対象として、表紙、タイトルページ、目次、楽譜の最初のページが印刷された資料を見ながら、書誌レコードを完成させるといったものだった。MARC21 のフィールドの名称、フィールドのタグ、インディケータやデータを穴埋め式で記録するもので、楽譜資料に固有なプレート番号や出版者番号などの記録のしかた、目次情報の入力などが理解できる。目録では、数年後に新しい目録規則を適用した書誌レコードの作成を行うことになるが、こうした導入的な練習問題を用意して

おくことは大きな助けになると感じた。

UK&Irl 支部の研修活動は、国内の状況が類似していることから、日本支部 30 周年記念事業を進めるにあたって大いに参考になるモデルである。UK&Irl 支部の活動は、2009 年 IAML アムステルダム大会でのサービス・研修委員会のセッションでも紹介されている。その際に、Ria Warmerdam 氏によりオランダも同支部の活動をモデルにしていることが紹介されている^{iv)}。各国の事例を活用しながら音楽ライブラリアンの養成体制を整え、自国用に適した研修を継続的に実施していくことが期待される。

(いとう まり)

注・参考文献

- i) Roper 氏は、現在ケンブリッジ大 Christ' s College に在職されており、当該所属は発表時のものである。
- ii) 伊藤真理. 音楽図書館情報学のための研修プログラム構築について. IAML ニュースレター, 2009, no. 34, p. 13-15.
- iii) IAML UK&Irl Branch の研修内容についての詳細は、下記 URL を参照のこと。
<http://www.iaml.info/iaml-uk-irl/training.html>, [Accessed 2011-12-01]
- iv) Service and Training commission report from 2009 conference in Amsterdam.
http://www.iaml.info/en/activities/service_and_training/2009, [Accessed 2011-12-01]

IAML ダブリン会議大会初参加の記

寺本 圭佑

2011年7月24日から29日にかけて、アイルランド共和国の首都ダブリンでIAMLの国際会議が開催された。IAML日本支部の参加補助金を賜り、私はこの会議に参加することができた。私の専門とする研究分野がアイルランドのハープ音楽なので、指導教授の樋口先生がぜひ参加するようにと助言してくださったのだ。大学院のゼミではRISMのKalistoの入力マニュアルを日本語翻訳するプロジェクトに参加させていただいていたが、RISMという組織の活動内容や、同組織とRILMとの関係などについては、ほとんど知識がなかった。IAMLの国際会議については、樋口先生のゼミで拝聴する機会があったが、その時は自分が参加することになるとは思いもよらなかった。そもそも国際会議に参加すること自体が初めての経験だったが、渡航前にIAML日本支部の先生方が色々細やかに気を遣ってくださったので、不安に感じることは少なかった。

なるべく安い航空券を探した結果、エティハド航空を利用し、アブダビ経由でダブリンへ。ダブリン空港に鉄道は通っていないので、バスで市街地のオコネル・ストリートまで向かう。そこから少し北のロトゥンダを横切って滞在先のマルドロンホテルへ。ロトゥンダはブリテン島およびアイルランド島で最古の産科病院に併設された円形の広間で、18世紀にはロトゥンダ・コンサートという大規模な定期演奏会が開かれていた。論文で研究対象としていた建物を直接見ることができて感動した。マルドロンホテルは、日本のビジネスホテルのようなところで、お手頃な価格にもかかわらず（ひとり一泊約3500円）、設備も整っていてきれいな部屋だった。4年前に泊った薄汚いB&Bよりもずっと快適だった。



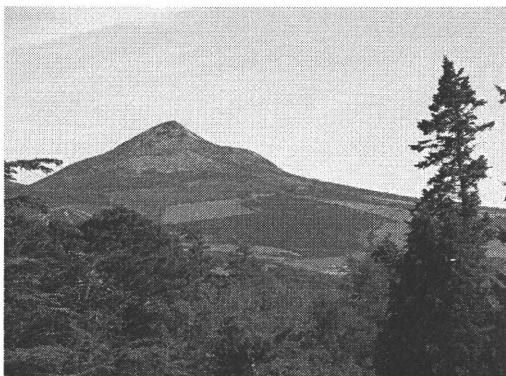
リフィ川の夕暮れ (@k.t.)

ホテル到着後、荷物を置いてすぐオープニング・レセプションの会場に向かう。オコネル・ストリートからリフィ川へ。ダブリン市を東西に流れるこの川は、よく見るとあまりきれいではないのだが、ダブリンで最も好きな場所で、いつも時を忘れて佇んでしまう。橋を渡って少し歩くと、IAMLの会場であるトリニティ・カレッジがある。1592年にエリザベス1世によって設立された歴史ある大学のひとつだ。期待に胸を膨らませながらキャンパスに足を踏み入ると、会場があると思われる建物は真っ暗で施錠されており、関係者らしき人がどこにも見当たらない。これはどうしたものかと30分以上さまよっていると、学者風の人を発見したので、おそろおそろ声をかけてみた。すると私たちと同様に迷っていたIAMLの会員の方で、ほんとうの会場を知っている方が同行しており、無事に会場まで案内してくれた。レセプションの会場は、

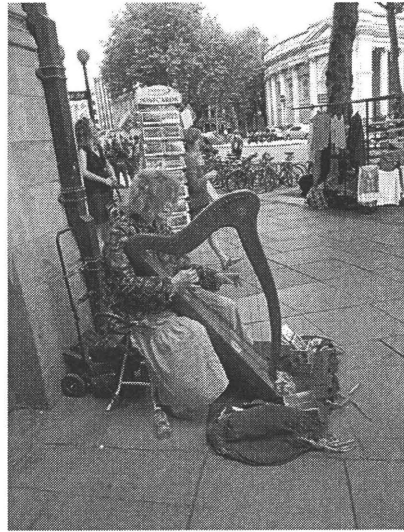
オープニング・レセプションにて
金澤支部長、筆者、荒川副支部長 (© k.t.)

大学から10分ほど離れたシティホールだった。会場には金澤先生、荒川先生、藤堂先生が既にいらっしゃって、IAMLのフルーリ会長やRISMのカイル先生にご紹介いただけた。フルーリ会長は気さくに話しかけてくださるだけでなく、東日本大震災について心を痛めてくださっており、細やかな気配りのできる方だと心服した。

翌日の早朝からIAML会議が始まった。8時半からのイントロダクションに参加、オープニングセッションを聞いた後、お昼にはRILMのランチミーティングに出席させていただいた。午後にはケルティック・ソングの研究報告があって、グラスゴウの王立スコティッシュ・アカデミーの方の報告が印象的だった。その後のナショナル・レポートで、金澤先生が私のことをアイリッシュ・ハープ奏者としてご紹介してくださった。そのおかげで、一部の参加者の方に覚えていただき、話しかけていただいた。アメリカ議会図書館の方で、ちょうど持っていた自分の録音を渡したら、なんと後日ご勤務先の図書館に寄贈していただき、カタログ登録までしていただいた。会期中「どうして日本人なのにアイリッシュ・ハープを演奏し、研究しているのか」と何度も尋ねられることがあった。アイリッシュ・ハープは19世紀に伝統が途絶えた後、復興がはじまったのは1980年代のアメリカからだ。アイルランドでは、21世紀に入ってから古いタイプのアイリッシュ・ハープのサマースクールが毎年開催されている。そこに参加しているのは、ア



Powers Courtから見た Wicklow mountain (@k.t.)



ハープを弾くブレンダ (© kt.)

メリカ、フランスやスペイン、ドイツ、スイス、ロシア、日本からが大半で、意外なことに現地アイルランド人は少数に限られている。アイルランドには外国人をひきつけてやまない不思議な魅力があるのではないだろうか。そんなことをふと考えた。

大会2日目はRILMのセッションに参加、その後オカハンとヴァレリーによるアイルランド音楽に関する研究報告を聞いた。オカハンの発表は、1920年代にアイルランドで民謡収集(録音)を行っていたノルウェー人のサンドヴィックについてのお話。今まで知らなかったトピックだったので大変勉強になった。夜は大学内のイグザミン・ホールで、バルトークやアイルランドの作曲家のプログラムによる素晴らしいコンサートがあった。

大会3日目のセッションでは、アイルランドのカントリーハウスに眠っている音楽資料の調査をされている方の発表があり、アイルランドの音楽資料研究の広がりを感じることができた。午後は遠足で、郊外のパワーズ・コートへ。天気も良すぎるぐらいで、遠景にウィックロウの山を望む広大な敷地を誇る庭園を散策して開放的な気分になれた。

遠足からダブリン市内に帰ってくると、トリニティ・カレッジの前でアイリッシュ・



シボーン・アームストロング氏による演奏 (@k.t.)

ハーブを弾く老婦人がいた。4年前にサマースクールで一緒にハーブを学んだブレンダで再会の喜びをわかちあった。夜はRILMのレセプション、会場は Hugh & Nesbitt というアイリッシュ・パブ。狭いスペースにはみ出しそうなくらい大勢の人が集まって、賑々しい雰囲気楽しかった。一步も身動きが取れないくらい状態で、デンマークの王立図書館の司書の方とフルーリ会長と親しく話すことができた。会長はアイランドの経済危機についても憂慮されており、「今回の国際会議の開催によって、少しでもアイランドの経済が潤えばいいね」とおっしゃっていた。

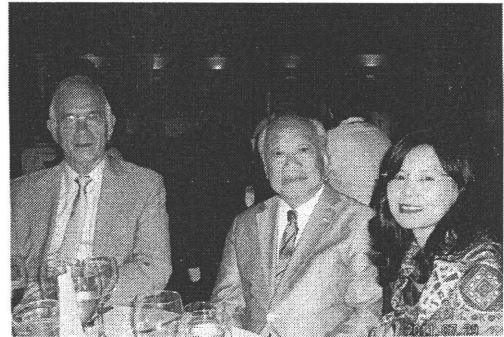
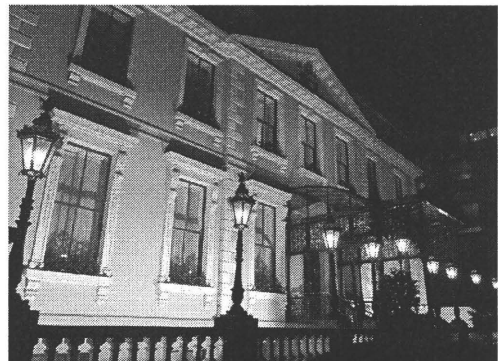
4日目の夕べには、アイリッシュ・ハーブと歌、フィドルとフルートのコンサートがイグザミン・ホールで開催された。解説はアイランド伝統音楽アーカイブ (ITMA) 館長のニコラス・カロランで、1724年にニール父子が出版した曲集からのプログラム。ちょうど私が博士論文で扱った資料だったので、とても興味深い内容だった。アイリッシュ・ハーブを演奏していたのはアイランド・ヒストリカル・ハーブ協会会長のシボーン・アームストロング。かつて樋口先生からご紹介いただき、2008年に明治学院大学バッハ・アカデミーの招聘で来日された時、京都で共演させていただいたことがある。彼女はトリニティ・カレッジに所蔵されている現存する最古のアイリッシュ・ハーブのレプリカを演奏した。ちなみに、今年の5月にエリザベス2世がトリニティ・カレッジを訪問した時にも、

オリジナル楽器の前でハーブを演奏したという。

最終日6日目は朝からニコラス・カロランの研究報告を聞きに行った。お話が終わった後で、彼とヴァレリーに話しかけてみた。ヴァレリーは博士論文をITMAに置いてもらったらいいのではないかとアドヴァイスしてくれた。

会の最後に、フェアウェル・ディナーに参加した。その会場はドーソン通りのマンション・ハウスといって、1821年にジョージ4世がアイランドを公式訪問した時の滞在先。当時4人の盲目のアイリッシュ・ハーブ奏者が、王の前で演奏したという記録が残されている。往時のハーブ奏者たちへの思いをはせながら、学会最後の夜の素敵な思い出となった。

(てらもと けいすけ)

フェアウェル・ディナー
クリストフ・ヴォルフ氏、金澤支部長、伊藤真理氏 (©m.k.)

フェアウェル・ディナー会場マンション・ハウス (©k.t.)

NEWS

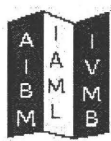
国立国会図書館の組織再編

2011年10月1日付で、利用者サービス部音楽映像資料課が新設された。旧資料提供部と主題情報部が統合されて利用者サービス部となり、その中に人文課、政治史料課などと並んで、音楽映像資料課が置かれた。業務内容は以下のとおり。

- ①所管資料に係る保管、保存、閲覧、複写、貸し出し、レファレンス及び証明
- ②音楽・映像資料室及び電子資料室の管理、運営、参考資料の選定
- ③所属書庫の管理

昭和音楽大学で開講される司書養成コースについて

昭和音楽大学では2012年度に司書養成コースを開講する運びとなった。すでに報道されている通り、文部科学省は2008年6月に図書館法を改正したが、新法のもとでの司書養成は二つの大きな変化がある。第一には司書養成の主流が大学や高等専門学校での専門教育に移ったこと、第二には必要単位が20単位から24単位に引き上げられ、4単位分を各教育機関で独自に開発できるようになったことである。図書館法改正を受けての昭和音楽大学における司書養成コースは音楽系大学では初めてのことである。



事務局だより



第51回例会・シンポジウム「ミュージック・ライブラリアンの養成」開催

昨年12月4日、東京文化会館第一会議室で行われた第51回例会は25名の参加者があり、近年まれにみる盛況であった。盛りだくさんの内容は2時間では収まりきらず、時間を30分延長しておこなわれた。国立国会図書館の組織再編や昭和音楽大学における来年度からの司書養成コース開催予定等、ホットニュースも紹介され、会場は熱っぽい雰囲気につつまれた。(詳細次号)

新会員

田島 克実氏 (株式会社トッカータ)
栗林あかね氏 (成城大学図書館)

RILM 役員選出

昨年11月17日に開かれた役員会で、来期RILM委員を選出した。いずれも留任。
関根和江、長谷川由美子、山田晴通(敬称略)

国際大会参加と国際会議参加補助基金について

2012年7月22日-27日の日程でカナダのモントリオールで開催されるIAML国際大会への積極的な参加をお願いします。

2001年より実施されている国際会議参加補助基金を使って現在まで5の方が国際大会に参加していますが来年も是非派遣したいと思います。積極的な応募を期待しています。

2012年度支部総会(予定)

2012年度支部総会は、6月3日(日)東京文化会館会議室にて開催されます。

お詫びと訂正

前号(42号)中、第50回例会報告をご執筆いただきました中西紗織氏のお名前に誤りがありました。謹んでお詫び申し上げます。

[誤] 中西沙織 → [正] 中西紗織

【目次】 ~~~~~

IAML 2011 DUBLIN / 金澤正剛	1
IAML 2011 ダブリン大会に参加して / 荒川恒子	4
音楽ライブラリアン養成の現状 / 伊藤真理	7
IAML ダブリン会議大会 初参加の記 / 寺本圭佑	9
ニュース 事務局だより	12

Newsletter 第43号

国際音楽資料情報協会 (IAML) 日本支部

2012年2月29日発行

〒171-8540 東京都豊島区南池袋3-4-5
東京音楽大学附属図書館内

<http://www.iaml.jp>